

# 天台寺の五月一日

東條 眞理子

今日という日に、ここまで来られるとは思っていなかった。とにもかくにもコロナ禍は少しずつ過去のものとなり、遂に天台寺にたどり着いたのだ。

二〇二四年五月一日のことである。

この日に備えて私は心臓のカテーテル検査を受け、奥歯にインプラントを入れた。同行の友人であり寂聴塾生でもある小林陽子は、外反母趾の親指の骨を削る手術をした。充分に若いとは言えない女二人の旅は、かくも苛酷にして入念な準備を必要としたのだ。

天台寺は行基が開いたとされる岩手の名刹である。奥深い山寺の長い坂や階段を登った先の日当たりのよい斜面に墓地があり、手入れのいき届いたその中ほどに、瀬戸内先

生の墓は在った。通路をはさんで隣りに、井上光晴先生御夫妻の墓が並んでいる。五月一日は、二人の先生の御存命なら一〇二才と九八才の誕生日、できることなら大声でハッピーバースデーを唄いたいくらいだ。空はどこまでも青く、他に人影は無く、鳥だけが唄う。

実のところ格別の信仰心もなく、近代教育の下で育った者として、このすっきりと清潔な墓の中に先生達が納まつて眠っておられると素直に信じられるものではない。全く、二人して不肖の弟子である。にもかかわらず、ここに来たい、来なければと考えたのはどういうわけなのか。

思えば今春はまるで先生に導かれるように三月は石山寺へ、四月は比叡山延暦寺へと詣でる機会があり、行く先々

で先生の足跡を見た。「ほら、その建物で寂聴さんが勉強しはりましたんや」と教えて下さった延暦寺の僧侶の声、耳に今も残る。先生は、あの小さな足で山道をどれほど歩いたのだろう。

先生を失って二年半、この間瀬戸内寂聴記念会が発足し、記念会事務局の熱意と献身の下、本誌「寂聴」の創刊、「寂聴記念会だより」の発行、インターネット投稿サイトnoteへの「瀬戸内寂聴記念会」の創設、ホームページの創設、講演会、朗読会、読書会等々、様々な活動が始まり、それは現在も継続している。

これらの活動への参加は、コロナ禍でのひきこもり生活からの脱却を促してくれた新たな喜びである。また最近になって仲間と師を得て、源氏物語を原文で読む会にも加わっている。私には原文を読む力は無いので瀬戸内源氏をすっかり頼りにしているのだが。

こうしたことの全ては、元はと言えば先生が遺してくれたものだ。墓前で考えてみる。先生との別れのあとも大災害は続き続け、新しい戦争が次々に起こり、子供達の絶望の涙も爆撃も止むことはない。こんな時、先生がいないと嘆いてばかりいてどうなるというのだ。訃報を聞いた時か

ら、自分の中に閉じてこめてしまっていた先生の不在をしつかりと認めて、前を向くべき時が来たのだ。

東北の青い空をもう一度見上げると、何かがキラッと光って消えた。これはもちろん、先生からのウインクなどではなく、ドローンか何かが反射したのだろう。

その後、六月に行なわれた二回目の記念会総会を経て、記念会会長を引き受けることになった。

初代会会長の岡本さんが専門の学問を修める時間が必要とことから、会長を辞されたのだ。記念会発足時より、ホームページの必要性や会のDX化の推進等、広い目で会を率いて下さった事に心から感謝する。

目の前に宝の山がある。四百冊に及ぶ小説、すばらしい伝記や随筆、源氏物語の現代語訳十巻、能や歌舞伎の台本に加えて、宗教者であり、行動する文学者であった先生の多面性、足跡の広さは今後も長く研究と敬愛に値すると確信する。瀬戸内寂聴記念会が、その礎の小さなひとつになれるなら、こんなに幸せなことではない。